

## Mandolin Ensemble “<sup>イド</sup>id” Winter Concert 2008

本井 理

### 総評

Mandolin Ensemble “id” (マンドリン・アンサンブル「イド」: 以下「id」と記載する) が単独でコンサートを開催するのは2003年11月の初コンサート以来、今回で6回目と聞く。筆者がidのコンサートを聴かせていただくのは今回が3度目だが、実はこの団体に対しては非常に大きな期待を抱いていた。

その理由は、過去のコンサートではメンバーによる独奏や重奏などを主体に最後にアンサンブル形式の全員合奏を行うなど少人数による演奏に積極的であったこと、メンバーの年齢が若いこと、さらに各種のイベントに積極的に参加していることである。

かねてより筆者はマンドリン合奏に関して、トレモロによる擦過音 (ピック・ノイズ) が余韻を上回ってしまうデメリットのため大編成のマンドリン・オーケストラに対しては批判的であった。逆に理想と考えるマンドリン・ギター合奏の編成は15名から20名前後なのだが、idはその条件にぴったり当てはまるのである。そして高校や大学の部活動の同期が中心となった同様の合奏団が増えれば、斯界の裾野も広がって演奏レベルも高まるであろう。大編成でなければこなせないような作品が演奏したければ、そのようなレベルの高い小合奏団が連合すればよいだけのことである。

しかし、その先鋒を担うべきidは、人数としては理想的でも演奏は毎回悪化の一途を辿っており、筆者の期待は常に裏切られ続けてきた。

今回のコンサートはメンバー16名による全員合奏のみで行われた。指揮者は立たず、第1マンドリン3名、第2マンドリン4名、マンドラ・テノーレ3名、マンドセロ2名、ギター3名 (友情出演1名を含む)、ベース1名で、本当はギターがもう少しほしいところだが、よい編成だと思う。

ところが肝心のメンバー諸君は**せつかくの少人数であるメリットを活かす知恵がなく、「少人数でもこれだけ迫力が出せるんだ」とばかり音量を追求する方向に走ってしまった**のである。おそらく、この団体は人さえ集めることができれば、マンドリン・アンサンブルではなく、マンドリン・オーケストラの方向に舵を切るに違いない。何たる愚かな…。

今回のコンサートの演奏結果は、すべて「汚い、騒々しい、乱暴、単調」といった評に

尽きる。演奏会場のザ・ルーテルホールは小規模で非常に音響のよいホールだが、ここで『パストラル・ファンタジー』を弾くように全力でぶちかます演奏をするのは狂気の沙汰としかいいようがない。さらに気負って力み過ぎた結果、指が回らず音もボロボロ外してしまっている。

ただ、最後の代表者挨拶によると練習期間は実質2ヵ月余りしかなかったとのことなので、以下の曲目ごとの論評では楽曲構築上の問題点に絞って指摘したい。

### **組曲第2番** (コンラート・ヴェルキ作曲)

プログラムの曲目解説を見ると「たいへん明るく、わかりやすい曲である」とあり「このような明るさは、ドイツマンドリン音楽の特色の一面でもある」と書かれている。実は「明るく、わかりやすい」といった印象を抱いたとすれば、それは舞曲の形式に依拠した作品が多いためであって、そのように感じる感性はよしとしよう。

しかし、舞曲でもっとも重要な楽曲構築ポイントは踊りのステップに由来するリズムだという認識がなければ何にもならない。各楽章のリズムの相違を無視して、ひたすらに「明るい曲だ」と喜び勇んで元気一杯力の限りに弾くのでは、単なる阿呆である。

したがって演奏としては論評の対象外といわざるを得ない。第1楽章と第4楽章の違いがはっきり出していないなど、楽章それぞれの雰囲気の変化が乏しいのは致命的であろう。

なお一言付言すれば、この作品においては音量の増減や緩急の設定は余り重要ではない。前者は同一旋律の1回目と2回目で機械的に変え、後者は各楽章の最後を自然に緩めるだけで十分である。肝心なことを無視して枝葉末節の部分に小細工を凝らすべきではない。

### **ノクターン** (スバルターコ・コペルティニー作曲)

リズムと楽曲の構造に重点を置く『組曲第2番』とは一転し、2曲目はロマンティシズム溢れる典型的なイタリア古典である。楽曲構築のポイントはメロディーをいかに美しく歌い上げるかということであるのは、いうまでもないだろう。しかし、その演奏は『組曲第2番』のトレモロ部分と全く変化がないものであった。

トレモロも荒過ぎるし、しかも近年、北海道でも悪病の症状が蔓延しつつある「フレーズレス演奏」なので全くいただけない。それに主旋律を鼻唄や口笛でトレースしてみれば分かると思うがメロディーというものは特に強弱の指定がなくても音程の変化に応じて自然に揺れるものなのに、その動きすらもなく全力でガナリまくっていた。

このほか転調による変化を理解していない点なども指摘したいが、それ以前に、こんなに乱暴で騒々しい夜想曲など世の中にあってよい訳がない。

### **Music for play** (クラウディオ・マンドーニコ作曲)

ようやく日本でも演奏機会が増えてきた作品であるが、実は「p l a y」とあるように

深刻な作品ではない。この作品が洒落ているのは、3つの楽章がイタリア人の得意とする伝統的な**急—緩—急**の序曲形式／ソナタ形式で構成され、第一楽章はマイナーとメジャーが揺れ動く**ハーモニー**の変化を、第二楽章は**メロディー**をピッキングとトレモロの双方で歌わせ、第三楽章は軽快な**リズム**で躍らせるという音楽の基本的な要素を盛り込んでいる点であろう。こうした認識があれば、各楽章の違いを明確に打ち出した演奏ができたはずであった。

しかし、演奏結果は、各楽章の違いはもとより前2曲とすら雰囲気の変化がなかった。

そもそも選曲の動機として、ただ「かっこよさそうな曲だから」といった安易な気持ちではなかったか？その姿勢を厳しく問いたいと思う。

**エジプトの秘境にて**（アルバート・ウィリアム・ケテルビー作曲／シルヴィオ・ラニエーリ編曲）

原曲は管弦楽曲であるが、演奏機会が多い曲ではないので、日頃筆者が主張している「クラシック音楽をマンドリン・ギター合奏で演奏する場合は撥弦楽器たるマンドリンの長所を活かした編曲や演奏を」云々といった議論を繰り返すつもりはない。

ただ、演奏を聴いて指摘したいのは、楽曲構造に対する無理解・無頓着である。

この作品はエキゾチックな舞曲と美しい旋律が交互に繰り返される構造で、それは誰が聴いても明白であろう。したがって楽曲構築のポイントはリズムとメロディーに交互にシフトするが、リズムはシンコペーションの切れが鈍くてまるで演歌のよう、メロディーはトレモロが汚い上にフレーズレス演奏で聴くに堪えないものがあつた。さらにバリエーションはあるものの、メロディーは一つに限られ、それが何回も出てくるのだが、それらの変化も皆無であつた。

**「リュートのための古風な舞曲とアリア」第三組曲より「イタリアーナ」**（オットリーノ・レスピーギ作曲／平佐修編曲）

「イタリアーナ」とは「イタリア（地方）の歌」「イタリア民謡」といったニュアンスになるので、明らかにアリアであろう。したがって楽曲構築のポイントはメロディーになるが、例によってトレモロが汚く、強弱に乏しい（強のみの）フレーズレス演奏であつた。

もう少し原曲のCDでも聴いて雰囲気をつかんでから演奏するようにはしていただきたい。

**弦楽のための三楽章「トリプティーク」**（芥川也寸志作曲／石川透編曲）

この演奏は実に画期的であつたといわざるを得ない。何しろ芥川也寸志の作品を伊福部昭、あるいは大栗裕の作品であるかのごとく演奏したのだから…。

もちろん褒めているのではなく皮肉で書いているのだが、本当にこの人達は何か重大な勘違いをしているのだとしか考えようがない。「変拍子と不協和音を多用している現代音楽

というものは、ことごとくドロドロと力強く弾かなければならない」とか。

原曲の演奏を聴いてみてほしいのだが、第1楽章はめまぐるしく曲想が変化しているし、第2楽章には切々と訴えてくる感情があり、第3楽章はリズムの変化やシンコペーションの展開が楽しい。全楽章を通じてパワフルに押し切れればよいというものではないと思う。

もっとも、そもそも弾くのがやっとなという段階でこれほど繊細な作品を演奏しなければならなかったことには同情を禁じ得ない。楽曲を理解する余裕などはなかったと思われるが、そうであれば最初から選曲すべきではなかっただろう。

以上、相当な酷評になってしまったが、残念ながら、これが北海道の若手奏者の実力である。そして、その中でも熱心な若者が集まっていると思われる i d の演奏でさえこのような有様では、本当に将来が思いやられる。

ただ、一人一人の演奏能力は、おそらく他の社会人団体の奏者よりは上だろうし、文中でも触れたとおり感性の鋭い部分も感じられ、選曲のセンスもよい点に一縷の望みを繋ぐことができるのではないだろうか。

「隠し芸大会」ではなく「芸術としての音楽」をやろうとするならば、謙虚にゼロから音楽を学び直す必要がある。そのためには出身大学の部活動や他の社会人団体における演奏経験、あるいは本州から来道公演した時代錯誤の合奏団による音量重視の演奏など大編成のマンドリン・オーケストラから得たものを一度御破算にすべきであろう。

西洋古典音楽には囲碁と同様、定石がある。すなわち一定のルールにしたがって、作品に何を感じ、聴衆に何を伝えたいかという感性を競うものなのだが、最初からルールを学びもせず、自分勝手な解釈（今回のコンサートでは何かを解釈した形跡すらない）をするのは音楽に対する冒涇だといわざるを得ない。

i d の皆さんは未だ若いので必ず生まれ変わることができるはずである。そして次回は筆者をも感動させるようなすばらしい演奏が行われることを心底期待して筆を置きたい（2008.01.26.18:30～、於：ザ・ルーテルホール）。